

報 告

高等学校に勤務する養護教諭と一般教諭の 小児がんに関する認識とがん体験者との関わり

畑江 郁子¹⁾, 木浪智佳子²⁾, 三国 久美³⁾
丸岡 里香⁴⁾, 川合 美奈⁵⁾, 澤田 優美⁶⁾

〔論文要旨〕

高等学校教諭の小児がんに関する認識とがん体験者との関わりを明らかにすることを目的とし、郵送法による質問紙調査を行った。養護教諭と一般教諭の計441名を対象として分析した結果、小児がんについて詳しく知ろうとしたことが「ある」と回答した養護教諭の割合は59.7%で、一般教諭の26.4%よりも多かった。がん体験者との関わりがあった教諭は22.0%で、そのうち42.3%の者が復学受け入れ時に困ったと回答した。困ったことで多かった内容は、一般教諭では進級に関する対応、養護教諭では学校行事の参加・生活に関する判断と調整であった。高校に復学したがん体験者に関わる教諭が正しい知識を持ち、体調管理や学習の支援を行う必要性が示唆された。

Key words : 小児がん, がん体験者, 高等学校教諭, 認識, 関わり

I. はじめに

小児がん治療の進歩は目覚ましく、小児がん体験者の5年生生存率は70%に達したが、退院後も外来での通院は継続され、学校生活と治療を両立させるための健康管理が必要になる。治療終了後には小児期に受けた治療の影響による晩期合併症のリスクがあり、低身長などの内分泌障害、二次がんの発症、神経症状では知能や認知の障害など多くの危険性が認められている¹⁾。また、小児がん体験者は、一般集団よりも教育レベルが低く、中でも脳腫瘍や白血病で頭部に放射線療法を受けた場合に顕著であったことが報告されている²⁾。これらのことから、がん治療後に復学した小児がん体験者には医療のみならず教育的支援が必

要であり、保護者や医療者、復学を受け入れる学校関係者間の連携が重要になる。

小児がん体験者の復学に関する報告によると、小児がん体験者との接触経験の少ない教諭が多いため、医療者は教諭に情報交換を積極的に働きかけ、復学に備えること³⁾、小児がん体験者が復学する際に教諭は情報不足で苦勞していること⁴⁻⁷⁾などが明らかにされている。しかし、これらの報告は、小中学生の小児がん体験者の復学に関するものであり、高等学校（以下、高校）に復学したがん体験者の報告はほとんど見当たらない。高校生になると、進学や就労に向けた社会的自立の準備など小中学生とは異なる課題が生じると推測される。高校に復学したがん体験者のこのような課題の克服を支援するためには、高校の教諭を対象とし

High School Teacher Awareness of Childhood Cancer and Involvement with Childhood and Adolescent Cancer Survivors

[2758]

Ikuko HATAE, Chikako KINAMI, Kumi MIKUNI, Rika MARUOKA, Mina KAWAI, Yumi SAWADA

受付 15. 8. 5

採用 16. 4. 28

1) 北海道医療大学（看護師）

2) 北海道医療大学（看護師／研究職）

3) 北海道医療大学（保健師／研究職）

4) 北翔大学（養護教諭／研究職）

5) 埼玉医科大学（看護師／研究職）

6) 天使大学（助産師／研究職）

別刷請求先：畑江郁子 北海道医療大学 〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

Tel : 0133-23-1211 Fax : 0133-23-1669

た調査を実施し、実態を把握する必要があると考えた。

そこで、本研究では、高校の養護教諭と一般教諭を対象に小児がんに関する認識、および治療後のがん体験者との関わりについての実態を調査し、高校に復学したがん体験者への支援における示唆を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究協力者と調査方法

北海道内の公立高校教育委員会と連絡を取り、調査の趣旨と方法について説明し承諾を得た。北海道内の全ての公立高校240校を対象として、各校の校長には研究依頼文と説明書を、養護教諭ならびに一般教諭には研究依頼文と説明書・無記名自記式質問紙を、それぞれ郵送した。なお、養護教諭が複数配置されている学校には、全員に調査を依頼した。一般教諭の選定は各学年から担任教諭1名ずつを選出するよう校長に依頼した。質問紙の返送をもって研究協力の同意が得られたとした。なお、質問紙の発送は平成26年5月末、回収は6～7月である。

2. 調査内容

i. 研究協力者の背景

職種（養護教諭／一般教諭）、年齢、教諭としての経験年数を尋ねた。

ii. 小児がんに関する認識

小児がんについて詳しく知ろうとしたことはあるか（「かなりある」、「少しある」、「あまりない」、「全くない」の4肢1択）、小児がんで最も多い白血病の予後に関する知識（「治る」、「ほぼ治る」、「半分くらいが治る」、「ほぼ治らない」、「治らない」の5肢1択）を尋ねた。さらに、復学した生徒が困ると予測されることについて先行研究を参考に⁴⁸⁾9項目を設定し、複数回答で尋ねた。

iii. がん体験者との関わり

がん体験者との関わりの有無を尋ね、「あり」と回答した者に、その生徒の発症時期、保護者との連絡（連絡を取ったか・どちらから取ったかの2項目）、復学受け入れ時に困ったことの有無とその内容（自由記載）を尋ねた。

3. 分析方法

統計ソフト SPSS for Windows ver.22を用いて、各

項目の記述統計を行った後、 χ^2 検定を用いて各項目の回答を養護教諭と一般教諭で比較した。有意水準は5%未満とした。「小児がんについて詳しく知ろうとしたことはあるか」という設問への回答は、「かなりある」、「少しある」を「ある」、「あまりない」、「全くない」を「ない」と2区分し、分析に用いた。自由記載で得た回答は、内容が類似したものを分類し、整理した。

4. 倫理的配慮

調査に先立ち、北海道医療大学看護福祉学部倫理委員会の承認を得た後、北海道教育委員会の承諾を得た。各校長および研究協力者には、文書で研究の主旨、研究の参加は自由意思であること、研究に同意しない場合も不利益を被ることはないこと、途中撤回の自由、研究終了後のデータの処分、情報管理の徹底について説明した。

III. 結果

1. 研究協力者の背景（表1）

養護教諭291名中149名（回収率51.2%）、一般教諭720名中292名（回収率40.6%）の合計441名から質問紙が返送され（回収率43.6%）、全てを有効回答として分析に用いた。研究協力者の年齢は50歳以上が38.0%と多く、経験年数は20年以上が58.1%と多かった。養護教諭と一般教諭では年齢（ $p = .002$ ）、経験年数（ $p = .034$ ）ともに有意差がみられ、養護教諭では50歳以上が50.3%と最も多く、一般教諭では40～49歳が34.2%と最も多かった。20年以上の経験年数があ

表1 研究協力者の背景

	計 n=441	養護教諭 n=149	一般教諭 n=292	p 値
年齢（歳）				
～29	46(10.4)	14(9.4)	32(11.0)	.002
30～39	90(20.4)	24(16.1)	66(22.6)	
40～49	136(30.8)	36(24.2)	100(34.2)	
50～	167(38.0)	75(50.3)	92(31.5)	
無回答	2(0.4)	0(0.0)	2(0.7)	
経験年数				
10年未満	85(19.3)	21(14.1)	64(21.9)	.034
10～20年	99(22.4)	29(19.5)	70(24.0)	
20年以上	256(58.1)	99(66.4)	157(53.8)	
無回答	1(0.2)	0(0.0)	1(0.3)	

() 内は%を示す。 χ^2 検定によるp値を示す。

表2 小児がんに関する認識

	計 n=441	養護教諭 n=149	一般教諭 n=292	p 値
小児がんについて詳しく知ろうとしたことはあるか				
ある	166(37.6)	89(59.7)	77(26.4)	.001
ない	270(61.3)	58(39.0)	212(72.6)	
無回答	5(1.1)	2(1.3)	3(1.0)	
白血病の予後				
治らない/ほぼ治らない	87(19.7)	17(11.4)	70(24.0)	.001
半分ぐらい治る	251(56.9)	84(56.3)	167(57.2)	
ほぼ治る/治る	83(18.8)	44(29.5)	39(13.4)	
無回答	20(4.5)	4(2.8)	16(5.4)	

() 内は%を示す。 χ^2 検定による p 値を示す。

る者は、養護教諭では66.4%、一般教諭では53.8%であった。

2. 小児がんに関する認識

小児がんに関する認識について得られた結果を表2に示す。小児がんについて詳しく知ろうとしたことが、「ある」と回答した養護教諭の割合は59.7%で、一般教諭の26.4%よりも多かった ($p = .001$)。小児がんで最も多い白血病の予後に関する知識では、「ほぼ治る/治る」と回答したのは養護教諭で29.5%、一般教諭で13.4%であった ($p = .001$)。復学した生徒が困ると予測されることで最も多い回答は「学業の遅れ」であった (表3)。

3. がん体験者との関わり

がん体験者との関わりについて得られた結果を表4に示す。がん体験者と関わったことが「ある」と回答した養護教諭は39.6%で、一般教諭の13.0%よりも多かった ($p = .001$)。がん体験者と関わったことが「ある」と回答した者にそのがん体験者の発症時期を尋ねたところ、高校入学前が66.0%であり、保護者との連絡を「取った」者は57.7%であった。保護者との連絡を「取った」と回答した教諭の33.3%は、保護者から連絡があったと回答した。自分から連絡したと回答した養護教諭は37.5%で、一般教諭の8.0%よりも多かった ($p = .015$)。復学受け入れ時に困ったことについて、「なかった」と回答した養護教諭は64.4%で、一般教諭の39.5%よりも多かった ($p = .023$)。また、復学受け入れ時に困ったことの内容は、養護教諭では「学校行事の参加・生活に関する判断と調整」が最も多く、一般教諭では「進級に関する対応」が最も多かった (表5)。

IV. 考 察

1. 養護教諭・一般教諭の小児がんに関する認識

本研究において、小児がんについて詳しく知ろうとしたことが「ない」と回答した高校教諭は、全体で6割を超えていた。小学校の養護教諭と一般教諭を対象とした調査⁴⁵⁾では、約8割の教諭が、小児がんの症状や副作用などを「知らない」と回答しており、小児がん体験者との接触体験がないことや、多忙を理由に積

表3 復学した生徒が困ると予測されること

	計 n=441	養護教諭 n=149	一般教諭 n=292
学業の遅れ	382(86.6)	130(87.2)	252(86.3)
学外行事(修学旅行や研修旅行等)への参加	229(51.9)	96(64.4)	133(45.5)
容姿の変化	224(50.7)	94(63.1)	130(44.5)
友だちとの関係	210(47.6)	86(57.7)	124(42.5)
進路の選択	187(42.4)	78(52.3)	109(37.3)
クラスメートへの病気説明	187(42.4)	71(47.7)	116(39.7)
体育への参加	184(41.7)	68(45.6)	116(39.7)
部活動への参加	105(23.8)	51(34.2)	54(18.5)
その他	14(0.3)	10(0.7)	4(1.4)
(再掲)			
周囲の人や環境になじめない	4	3	1
学校生活上の環境の不備	3	1	2
学業に適應する体力の不足	1	1	0
無効回答	6	5	1

() 内は%を示す。

表4 がん体験者との関わり

	計 n=441	養護教諭 n=149	一般教諭 n=292	p 値
がん体験者との関わり				
あり	97(22.0)	59(39.6)	38(13.0)	.001
なし	343(77.8)	90(60.4)	253(86.7)	
無回答	1(0.2)	0(0.0)	1(0.3)	
その生徒の発症時期 ¹⁾				
高校入学前	64(66.0)	38(64.4)	26(68.4)	.684
高校入学後	33(34.0)	21(35.6)	12(31.6)	
その生徒の保護者との連絡 ¹⁾				
取った	56(57.7)	32(54.2)	24(63.2)	.361
取らなかった	36(37.1)	24(40.7)	12(31.6)	
無回答	5(5.2)	3(5.1)	2(5.2)	
どちらから連絡を取ったのか ²⁾				
保護者から	19(33.3)	11(34.4)	8(32.0)	.015
教諭から	14(24.6)	12(37.5)	2(8.0)	
その他	24(42.1)	9(28.1)	15(60.0)	
(再掲)				
両者から	19	7	12	
保護者, 本人から	2	1	1	
家庭訪問で知った	1	0	1	
病院へ訪問し面談した	1	1	0	
無効回答	1	0	1	
復学受け入れ時に困ったこと ¹⁾				
あった	41(42.3)	20(33.9)	21(55.3)	.023
なかった	53(54.6)	38(64.4)	15(39.5)	
無回答	3(3.1)	1(1.7)	2(5.2)	

() 内は%を示す。 χ^2 検定による p 値を示す。

¹⁾ がん体験者との関わり「あり」と回答した 97 人に尋ねた。

²⁾ 保護者と連絡を「取った」と回答した 56 人に尋ねた。

表5 がん体験者の復学受け入れ時に困ったこと

(自由記載)

	計 n=41	養護教諭 n=20	一般教諭 n=21
進級に関する対応	10(24.4)	4(20.0)	6(28.6)
学校行事の参加・生活に関する判断と調整	10(24.4)	7(35.0)	3(14.3)
学校内の整備の不備	4(9.8)	2(10.0)	2(9.5)
心のケア	4(9.8)	3(15.0)	1(4.8)
体調管理への対応	4(9.8)	4(20.0)	0(0.0)
がん体験者の病状説明	4(9.8)	0(0.0)	4(19.0)
体調不良時の対応	3(7.3)	2(10.0)	1(4.8)
がん体験者の死にまつわる教諭としての役割	3(7.3)	0(0.0)	3(14.3)
卒業後の進路に関する対応	3(7.3)	1(5.0)	2(9.5)
個別性に合わせた学習サポート体制の不備	1(2.4)	0(0.0)	1(4.8)
教諭間での情報共有	1(2.4)	1(5.0)	0(0.0)
保護者への対応	1(2.4)	1(5.0)	0(0.0)

() 内は%を示す。がん体験者の復学受け入れ時に困ったことが「あった」と回答した 41 人に尋ねた。

極的に小児がんについて知ろうとしないことが報告されている⁴⁾。小学校教諭と同様に積極的に小児がんについて知ろうとしない高校教諭が半数を超えるという実態が明らかになった。

また、白血病の予後を尋ねたところ、「ほぼ治る/治る」という回答が高校教諭全体の約2割であった。小児期に発症した白血病の5年生存率⁹⁾は、70~80%であることから、大多数の教諭が誤った予後の知識を持っていることが推察された。小中学校教諭を対象とした調査³⁾では、小児がんに関する知識の中で、誤った知識を持っていた割合が最も多かったのは予後についてであり、適切な知識を教員に提供することが、小児がん経験者の復学後の生活において重要であると述べている。

高校の養護教諭と一般教諭の回答を比較したところ、養護教諭は一般教諭よりも、小児がんについて詳しく知ろうとしたことがあり、白血病の予後の正しい知識を持っていた。全国調査による15~19歳までの悪性新生物の有病率¹⁰⁾と、高校生の総数¹¹⁾、高校の一般教諭および養護教諭の人数¹²⁾をもとに算出すると、一般教諭とがん体験者の比は、1対0.032であり、養護教諭とがん体験者の比は、1対1.16である。このことから、養護教諭に比べて一般教諭ががん体験者と関わる機会は稀であり、小児がんに対しての関心は低いと推察する。加えて、養護教諭は、養成課程の教育内容に医学的知識の習得が含まれていることや、児童生徒の健康管理を役割としていることから、一般教諭よりもがん体験者に対する関心は高く、知識も豊富であったと考える。がん治療は日々進歩していることから、がん体験者の復学を支援する際に、養護教諭のみならず、一般教諭も最新の知識を得る必要がある。

復学した生徒が困ると予測されることとして得られた回答の順位は、両教諭ともに類似していた。青年期の小児がん体験者の回顧的語りでは、復学時に治療の副作用や長期入院による脱毛や体力・学力の低下を実感していた¹³⁾。また、思春期に発症したがん患者は、友だち関係に困難を感じるとともに、進路選択への不安を抱いていた¹⁴⁾。「容姿の変化」、「友だちとの関係」、「進路の選択」という高校生に特徴的な項目への回答が、教諭全体で4割を超えていたことは、がん体験者と接した経験の有無にかかわらず、両教諭が高校生の特徴や発達課題を踏まえて、困ることを予測できていたと考える。

2. がん体験者との関わり

がん体験者と関わる機会のある一般教諭の割合は、前述した全国調査から算出すると3%程度と推計される。本研究で、がん体験者と関わったことが「ある」と回答した一般教諭の割合は、全国の推計値より高かったものの、養護教諭より低かった。これは、小学校教諭を対象とした調査結果^{4,5)}と同様であった。その理由として、養護教諭は全校の生徒を対象とした健康管理を行っており、疾患をもつ生徒と関わる機会が一般教諭と比べて多いことが考えられる。

がん体験者に関わった教諭の約4割が保護者との連絡を取らなかったという結果は、小学校教諭を対象とした先行研究の結果⁵⁾と一致していた。今後は、教諭と保護者が連絡を取った場合の内容や取らなかった理由を明らかにし、両者が連絡を取り合う必要性を検討することが望まれる。

小学校教諭を対象とした調査⁵⁾では、がんの子どもの対応で最も困った内容は、「本人への精神的ケア」であった。本研究では、がん体験者に関わった教諭の約4割は、復学受け入れ時に困ったことがあったと回答した。その内容として、教諭全体では「進級に関する対応」が最も多かった。先行研究の結果と本研究との違いには、がん体験者の年齢の差が影響していると推察される。高校生の場合、入院や通院、体調不良などによる欠席は、学業の遅れや出席日数の不足につながり、単位取得や進級に影響を及ぼす可能性が高い。平成6年に文部科学省は、小・中学校で入退院を繰り返す児童生徒に対して、院内学級や訪問学級などの教育体制の整備を行った¹⁵⁾。小中学生同様に高校生に対しても、入院中の学習継続支援として院内学級もしくは訪問学級など、短期間であっても簡便に利用できる教育システムの拡大が望まれる。さらに、復学後にも、治療や入院・通院による学習の遅れを取り戻し、支障なく進級できるための学習支援が必要である。

本研究では、養護教諭と一般教諭で復学受け入れ時に困ったことに違いがみられた。一般教諭では「進級に関する対応」、「がん体験者の病状説明」、養護教諭では「学校行事の参加・生活に関する判断と調整」、「体調管理への対応」であった。これらの回答の違いには、高校での養護教諭と一般教諭の役割が反映されていると考える。それに加えて、がん体験者自身が相談内容に応じた相手を選別し、体調に関しては養護教諭を選んでいたためではないかと推察された。また、「学校

内の整備の不備」などの教諭個人だけでは、解決が難しい内容が示されており、がん体験者を取り巻く関係者の間で課題を共有し、支援につなげていくことの重要性が示唆された。

V. 研究の限界と今後の課題

本研究において、養護教諭の方が一般教諭よりも質問紙の回収率が高く、小児がんやがん体験者への関心度の違いが影響した可能性がある。また、全国の高校の養護教諭の年齢および経験年数の分布を見ると、50歳以上は約3割¹²⁾、20年以上が約5割¹⁶⁾であるのに対し、本研究協力者の養護教諭では50歳以上が約5割、経験年数20年以上が約7割と多かった。年齢や経験年数が多い教諭ほど、がん体験者と関わる機会が多いことが推測される。加えて、一般教諭において、がん体験者と関わったことがある者が全国の統計から推測される割合よりも多かった。がん体験者と関わったことがある教諭は、積極的に小児がんについて知ろうとすることが考えられる。これらのことより、調査協力者の自己選択バイアスが生じた可能性が考えられる。このように本研究では、全国の高校教諭よりもがん体験者に関わった経験がある者、小児がんに関心が高く、知識のある者が多く含まれていると推測されるため、結果の一般化には限界がある。今後は調査対象を広げるとともに、がん体験者の保護者と教諭が、連絡を取らなかった理由や取った場合の内容も含めた復学支援の実態調査が必要である。

VI. 結 論

1. 小児がんについて詳しく知ろうとしたことは「ない」と回答した一般教諭が7割以上であり、がん体験者の復学後の生活で生徒が困ると予測されることとして最も多かった回答は、一般教諭、養護教諭ともに「学業の遅れ」であった。
2. がん体験者との関わりがあった教諭は2割で、そのうちの4割の教諭が保護者との連絡を取っていなかった。またがん体験者との関わりがあった教諭の4割が復学受け入れ時に困ったことがあったと回答した。その内容は一般教諭では進級に関する対応が最も多く、養護教諭では体調管理に関する内容が多かった。
3. 高校に復学するがん体験者に関わる教諭が、がん体験者に関する正しい知識を持ち、生徒の体調管理

と進級のための学習支援を行えるような方策を検討する必要がある。

謝 辞

本研究に参加いただきました高校の教諭の皆様、またご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

この研究は北翔大学北方圏学術情報センターポルトの研究助成を受けたものである。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 石本浩市. 小児がん体験者の抱える諸問題とケア. 小児看護 2006; 29: 1633-1636.
- 2) Lancashir ER, Frobisher C, Reulen RC, et al. Educational Attainment Among Adult Survivors of Childhood Cancer in Great Britain. A Population-Based Cohort Study. Journal of the National Cancer Institute 2010; 102: 254-270.
- 3) 副島堯史, 村山志保, 東樹京子, 他. 小中学校の教員における小児がんへの認識および小児がん経験者への支援. 小児保健研究 2014; 73: 697-705.
- 4) 大見サキエ, 須場今朝子, 高橋佐智子, 他. がんの子どもへの教育支援に関する小学校教員の認識—A市における全校調査—. 小児保健研究 2007; 66: 307-314.
- 5) 大見サキエ, 宮城島恭子, 河合洋子, 他. がんの子どもへの教育支援に関する小学校教員の認識と経験—B市の現状と課題—. 小児がん看護 2008; 3: 1-12.
- 6) 大見サキエ, 河合洋子. 小学校教員のがんの子どもへの復学支援—一般教員, 院内学級教員, 養護教諭の面接調査—. 医学と生物学 2013; 157: 726-731.
- 7) 畑中めぐみ. 思春期の小児がん患児の復学後の情報開示. 小児保健研究 2013; 72: 41-47.
- 8) 平賀健太郎. 小児がん患児の前籍校への復学に関する現状と課題—保護者への質問紙調査の結果より—. 小児保健研究 2007; 66: 456-464.
- 9) Amy ML, Julie AR. Childhood and Adolescent Cancer Survival in the US by Race and Ethnicity for the Diagnostic Period 1975-1999. Cancer 2008; 113: 2575-2596.
- 10) 政府統計の総合窓口. <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001141596>. (2015.12.25)
- 11) 厚生統計協会編. 一般財団法人厚生労働統計協会.

- 国民衛生の動向 (2015/2016)・厚生指標増刊. 東京, 2015; 62: 375.
- 12) 政府統計の総合窓口. http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&classID=000001066163&cycleCode=0&requestSender=dsearch. (2015.12.25)
- 13) 畑江郁子. 小児がん治療を終了した青年の病気体験. 小児がん看護 2013; 8: 27-36.
- 14) 森 浩美, 嶋田あすみ, 岡田洋子. 思春期に発症したがん患者の病気体験とその思い—半構造化面接を用いて—. 日本小児看護学会誌 2008; 17: 9-15.
- 15) 文部科学省. 文部科学省病気療養児に対する教育の充実について (通知). http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1332049.htm. (2015.7.20)
- 16) 政府統計の総合窓口. <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001058723&cycode=0>. (2015.12.25)

[Summary]

A mail questionnaire survey was conducted to identify the relationship between the awareness of childhood cancer among senior high school teachers and their involvement with childhood and adolescent cancer survivors.

A total of 441 school nurses and general teachers were analyzed. Respondents who made an effort to learn more about childhood cancer accounted for 59.7% among school nurses much higher than 26.4% among general teachers. In total, 22.0% of the respondents suggested their involvement with children and adolescents who have cancer, of whom 42.3% said they encountered problems when the children and adolescents returned to school. The most frequent problem was the handling of advancement to the next grade for general teachers, and judgment and coordination of participation in school events and daily living for school nurses, respectively. The results suggest a need for teachers to be involved with children and adolescents who return to high school after cancer treatment to be adequately informed, and to help the returnees maintain good health while learning.

[Key words]

childhood cancer,
childhood and adolescent cancer survivors,
high school teachers, awareness, involvement